

第78回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

令和6年4月17日 日本建築学会近畿支部

《短大・高専・専修学校の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	石切りの遺産 悠久の時を超えて島へと続く道	長谷部恭平	中央工学校OSAKA 建築学科	14
2	工藝と建築	熊田 玄	京都建築専門学校 建築科二部	5
3	再軌道の糸口 -GROWTH CENTER-	本田健吾	中央工学校OSAKA 建築学科	18
4	<u>東地区中心市街地複合施設「マイコム」のあり方</u>	奥田 歩	舞鶴工業高等専門学校 建設システム工学科	20
5	<u>力士が告げる春 -大相撲宿舎と商店街の融合-</u>	関川珠音	明石工業高等専門学校 建築学科	11
6	ふねしる ～人を育てる造船所～	西尾尚晃	京都建築専門学校 建築科二部	20
7	<u>舩倉島音風景 ハレとケによる意識の変化</u>	橋本叶生	京都建築大学校 建築学科	12
8	コモンズの暮らし	辻本恵人	修成建設専門学校 建築学科	11
9	街灯り、滲み出し。	上村 藍	舞鶴工業高等専門学校 建設システム工学科	2
10	そっと、そばにぬくもりを ～今だからこそ、必要な場所～	中野志都	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	30
11	住吉停車場	金端息吹	明石工業高等専門学校 建築学科	8

(受付順) 以上11点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《工業高校建築科の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	<u>「街の営みへ溶けゆく舞台」 - 藤井寺市民総合会館建て替え計画 -</u>	金森祐樹	大阪府立工芸高等学校 建築デザイン科	5
2	博物館	宮山弥月	奈良県立奈良商工高等学校 建築工学科	5
3	<u>憩いのペンション ～繋がりの道で繋がる関わり～</u>	森下夢香	大阪府立工芸高等学校 インテリアデザイン科	7
4	幼稚園	辻井佑弥	奈良県立奈良商工高等学校 建築工学科	7
5	<u>継承 ～未来へ受け継ぐ大和魂～</u>	中村綾乃	大阪府立工芸高等学校 建築デザイン科	6

(受付順) 以上5点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部

令和5年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校
卒業設計コンクール（第78回）審査報告

審査員長 朽木順綱

2024年4月17日（水） 審査会場：オンライン（Zoom）を利用

審査員長（互選） 朽木順綱

審査員（50音順） 伊丹絵美子・小見山陽介・高木真人・多田正治・槻橋 修・宮地茉莉

応募作品 短大・高専・専修学校の部11点、工業高校の部5点（別紙参照）

審査経過と審査講評

本年度は昨年度と同様に、各審査員が事前配布された応募作品のPDFデータを審査当日までに確認したうえで、4月17日（水）にオンライン（Zoom）により審査を行った。当日は審査員7名のうち6名が出席し、1名が欠席した。審査に先立ち、卒業設計審査の目的・対象・提出・審査などの内規を確認し、審査員の互選により審査員長を選出した。

本年度の応募作品は、「工業高校の部」5作品、「短大・高専・専修学校の部」11作品であった。審査は、まず各審査員がそれぞれの部門において優れていると考える作品（3点以内）を投票し、多数票を得た上位作品を入選候補として確認しつつ、少数票を得た作品については、当該作品に投票した各審査員がコメントしたのち、それらを入選候補に加えるかどうかについて議論するという流れで進めた。その後、入選候補とした各作品について審査員相互に意見交換を行い、最終選考を行った。なお、欠席の審査員については事前に投票する作品を事務局に連絡し、その内容を投票に反映している。以下はその選考過程の詳細である。

まず「工業高校の部」の投票結果は、No.1が7票、No.3、No.5が6票、No.4が1票であった。各審査員ともに評価が概ね一致し、上位3作品がほぼ満票という結果であったため、まずはこれらを入選候補として認めたいと、少数票を得た作品については、審査員全員による議論を経て、丁寧な設計による良作ではあるものの提案力不足としてやむなく選外とする判断を下した。その後、入選候補の3作品について、各審査員による意見交換を行い、最終の選考を行った。議論は主に、課題設定における着眼点の独自性と、これに対する設計内容の妥当性、敷地における配置計画、および空間構成の適切さに加え、図面表現の技術力についてなされた。まずNo.1については、上記の論点全てにおいて秀でており、とくに外構計画と建物ヴォリュームとの巧みな調和が評価された。ただしこれを実現する前提が、大規模な地下空間である点には疑義が残された。また、No.3は課題設定に対するきめ細やかなリサーチと、これに基づく丁寧な計画が優れているものの、提案した全ての施設が計画しきれていない点に課題を残していること、No.5については課題設定についての独自の着眼点と敷地全体を生かした計画に秀でている一方で、建物じたいへの主題の反映がじゅうぶんに見出し難いことが、各作品への評価として提示された。以上の議論を経て、学生への奨励という本賞の趣旨も鑑み、応募作の半数を超えるもののこれら3作品をすべて入選

作として決定した。

つづいて「短大・高専・専修学校の部」の投票結果については、No. 5が7票、No. 7が6票、No. 1が2票、No. 4、No. 6、No. 8、No. 11がそれぞれ1票であった。まずNo. 5とNo. 7については際立った得票数であるため、これを入選候補とし、少数票を得た残り5作品について、それぞれに投票した各審査員を中心に具体的な評価点を提示しあい、それらを入選候補として加えるかどうか議論した。評価の基準は、対象敷地や課題設定に対するリサーチと両者の合致に関する適否、またこうした課題や敷地に対する設計内容の妥当性や独自性、および空間構成や構造計画、図面表現の熟達度であった。少数票を得た5作品については、No. 1は強度のある軸線を中止とした配置構成と建物ヴォリュームの巧みな組み立てが評価された一方で、この軸線と内外空間との相関にやや単調さが見られること、No. 4は敷地や既存建物の課題を丁寧に読み解き、実際の聞き取り調査の結果も踏まえつつ思い切ったコンバージョン計画を行うという提案性と、その裏返しとしての現実性への疑義、No. 6は敷地の課題を大胆に具現化した野心作であるものの、空間がややスケールアウトしていることへの懸念、No. 8は、設計に至る計画学的アプローチが評価される一方で、独自の提案がじゅうぶんには見られなかったこと、No. 11は、広域にわたる敷地や周辺調査が綿密であるものの設計建物にその知見の反映が見出し難かったこと、などが意見として挙げられた。これらについて再度審査員による投票を行った結果、No. 1、No. 4、No. 6、No. 8がすべて同数票となったため、上記議論を踏まえ、審査基準に照らしてもっとも幅広い観点から評価を得たNo. 4を入選候補とした。最後に、入選候補となった3作品について改めて講評を行い、No. 4に対する先述の評価に加え、No. 5の極めて機知に富んだ課題設定と調査、および計画学的手法を応用しつつ独自の設計へと導くプロセスの説得力への評価、ならびにNo. 7がもつ詩情豊かな表現力とその背景において控えめな通奏低音のように貫かれている敷地や周辺地域への深い洞察力への共感が、審査員全員において共有された。以上の議論をもって、No. 4、No. 5、No. 7を入選作として選出することとした。

以上、「工業高校の部」「短大・高専・専修学校の部」ともに力作ぞろいであり、とくに近年の応募作の傾向として、課題設定に伴う調査や分析と、その知見から導かれる計画手法において、丁寧さと独自性に秀でたものが多かった。このことは、建築設計を閉じた目的とするのではなく、開かれた手段として地域や社会へと還元しようとする今日的潮流の反映ではないかと思われる。

最後に、今年度は昨年度に比べ、「短大・高専・専修学校の部」においては応募数がいくらか増加したものの、「工業高校の部」では応募校、応募数ともに少なく限定的であった。建築設計の将来を担う学生、生徒への支援としての位置づけをもつ本コンクールの性質にも鑑み、今後とも積極的に作品を応募していただくことが望まれる。

(朽木)

短大・高専・専修学校の部
入選作品（3作品）選評

（五十音順）

東地区中心市街地複合施設「マイコム」のあり方提案

奥田 歩君（舞鶴工業高等専門学校）

利用者が減少し、老朽化した「コミュニティ施設付き立体駐車場」のコンバージョンを通して、周辺地域の抱える諸問題の解決と、新たなニーズの開拓を同時実現しようと目論む、極めてプラクティカルで実直な提案である。敷地および周辺調査や実際の聞き取り調査などで浮かび上がる課題は、往々にして多方面に散逸しがちであるが、これらを「まちに開く」「第三の居場所」など、簡潔で今日的な主題へと収斂させ、地域の将来への期待感を醸成する提案力は群を抜いて巧みである。また、空間提案としても、立体駐車場の単調なグリッド構造に対して45°方向に斜行したL字壁を挿入することで、閉鎖的な既存建物に空間の流動性を付与し、結果として生まれた中間領域を「ミュージアム」という賑わい空間に見立てている点には、適用する設計手法の特性と効果について、周到な検討が重ねられたことが伺われる。

計画内容の着実性や論理性の一方で、建築図面の表現においては訴求力に乏しかった点が惜しまれる。設計内容の説明資料としては十分な表現ではあるものの、課題解決を超え出るような空間感覚や建物の存在感などを想起させる、大胆なイメージの提示やレイアウトにも挑んでほしい。

（朽木）

力士が告げる春—大相撲宿舎と商店街の融合—

関川 珠音君（明石工業高等専門学校）

大相撲巡業のための宿舎によって、商店街を活性化しようというユニークな提案である。巡業中の力士のための様々な施設を商店街に配置していくなかで、巡業期間外の使われ方はもちろん、既存の商店との関係を調整し町並みや賑わいについても提案している非常に完成度の高い作品である。

設計者が「太鼓やぐらグリッド」「ます席グリッド」と称する架構のデザインについては曖昧な点が見受けられるが、それでも新しい商店街の風景、パブリックスペースのあり方を予感させる。

また既存の相撲部屋の空間構成やファサードを参照し、さらに身体の大きな力士の単位寸法を見出すなど、説得力のある設計のアプローチも高く評価した。

相撲宿舎という未知のビルディングタイプに対し、設計手法を確立し、建築としてまとめあげた力量は大変素晴らしい。

（多田）

舢倉島音風景 ハレとケによる意識の変化

橋本 叶生君（京都建築大学校）

舢倉島は能登半島の北側の沖合50kmに浮かぶ離島で古くから人が住み着いており、400年前から海女漁の文化が根付いている。本年元日の令和6年能登半島地震においても津波が到来し大きな被害を受けた。作者は父の故郷であるこの島に訪れた幼少期の記憶を頼りに島の豊かで変化に富んだ自然環境を再編し、観測できる空間の設計に取り組んだ。特に建築と周囲の変化によって生まれる音環境に焦点を当て、増幅・反響・無音など、建築を楽器の連なりのように計画し、周囲の風景に馴染ませる設計を行なっている。また単なる環境観測装置としての計画のみならず、島の多様な生態系が残る「メダケ群落」に隣接し、日本海へ沈む夕陽が望める入江を選定し、島の祭礼行事である神輿の入水行事の場所を含めた計画とするなど、島のコミュニティとの距離感に適切な配慮が感じられる。表情豊かなドロイングと共に、小規模ではあるが身体的なスケール感に優れた作品である。

（槻橋）

工業高校の部
入選作品（3作品）選評

（五十音順）

「街の営みへ溶けゆく舞台」－藤井寺市民総合会館建て替え計画－

金森 祐樹君（大阪府立工芸高等学校）

市民の生活とは少しキョリのある公共施設という「市民会館」の建て替え計画である。ボリュームの大部分は地下に埋め込まれ、伸びやかなランドスケープにより包み込まれる。地域に点在する古墳のスケール感が意識されたランドスケープと建築が一体化した豊かな造形は、大変、魅力的である。様々な営みの場になるように、また、そのニーズの時代による変化も視野に、舞台上のような可動式の壁と幕により空間を変化させる仕掛けも、興味深い。屋外空間においても、営みの場となる工夫やシーンを見せてくれば、提案の説得力が増したのではないだろうか。とはいえ、丁寧な設計、コンセプトと空間の一貫性、屋内外が一体となった魅力的な造形、全体のバランスの良さなど、高く評価できる秀作である。

（伊丹）

継承～未来へ受け継ぐ大和魂～

中村 綾乃君（大阪府立工芸高等学校）

若者や外国人観光客を対象に、日本の伝統工芸を学びその良さを知ってもらうための体験型複合施設の提案である。平面図や断面図には椅子やソファ等の什器が丁寧に描き込まれ、施設の賑わいが示唆される。職人や料理人が実際に作業する様子を来場者が間近で見えることを重視した平面計画や、施設全体が一つの村として見えるよう統一された外観などが特徴的である。優しい色合いで着色された外観パースには、ここを訪れた家族の人影や、四季折々の風景も描かれている。食事処も麺類とご飯類で建物を分けるほど徹底された分棟形式により、分散配置されたトイレも含め全ての建物はこの集落の風景を構成する要素として並列に扱われている。計画の全貌は最後のシートである施設内マップによく現れており、中央付近に配された広場や池と、その周りに環状に配置された各施設との間を、遊歩道のネットワークが結んでいる。この場所を訪れる人たちは印象的な二重門をくぐり思い思いに伝統工芸を訪問する。製作者が持つ伝統工芸への憧憬と敬意を感じる力作であり、優秀作品として選出した。

（小見山）

憩いのペンション～繋がりの中で繋がる関わり～

森下 夢香君（大阪府立工芸高等学校）

大阪府岸和田市の久米田池公園に隣接する敷地に複合施設を提案した作品である。岸和田だんじりや農業を通じて多世代交流ができるプログラムの提案をするべく、それぞれの世代が持つ課題を整理した上で、伝統行事、岸和田の特産物などをリサーチし、広場や農園を中心に高齢者施設や食堂などを配置している。現代社会が抱える課題解決に対し、岸和田特有の既存のコミュニティのつながりを活かし、積極的に設計の中に取り込もうとした姿勢を評価した。

複合施設の提案として多くのプログラムを取り入れようとしたあまり、全てのプログラムを建築設計にまで落としきれていなかった点が残念である。タイトルにもあるようにコミュニティの関わりを道で繋げようとした試みは部分的に見受けられたが、それぞれのプログラムが空間としてどのように繋がるのか、敷地計画提案に留まらず建築設計として提案して欲しかった。

（宮地）